

「吉田北中学校校歌の背景」

文責 十田孝志 (R3-4 校長)

1 はじめに

今回、令和4年10月3日付け南日本新聞「校歌の風景」(68)のための取材を受けた。校歌について何の情報も持っていなかったが、間近に迫っていた小中合同大運動会で「西下田ノ神棒踊り」30年ぶりの復活を目指していたところだったので取材を受け入れ、棒踊りのことも取材してもらえよう依頼した。おかげで、9月29日付けの紙面には「地域の棒踊り30年振りに復活」との見出しで記事にしてもらえたことができた。続けて、校歌の記事も掲載されたので、地域の方々にも喜んでくれたのではないと思う。しかし、取材前の調査にかけられる時間は殆どなく、唯一辿り着いたのが30周年記念誌に挟まれていた浜田喜代子著「高牧山のふとこころに」から抜粋された数枚のコピー(吉田北中学校のあゆみ)だった。これを手掛かりにして原本を探したが、本校には無かったため司書の三神教諭に相談して、谷山市民会館図書室から取り寄せることができた。本の中には校歌に直結する資料は他に見当たらなかったが、吉田の歴史について特に西郷さんとの深い関りがあるとの記述があり、作詞の新屋敷幸繁先生もその情報を浜田さんや作詞を依頼された平原政治先生等から聞いていたであろうことは十分に推察できた。

2 作詞と作曲を担当された先生について

ウィキペディア及び、ネット上に公開されている情報から検索した結果を以下にまとめた。

(1) 作詞「新屋敷 幸繁(こうはん)」氏(1899-1985)

略歴	上段文学歴 / 下段校歌作詞
沖縄県与那城町生まれ	1924：鹿児島で詩誌「非詩人」に参加
1923：鹿児島立第二鹿児島中学(旧制)教員	1926：東京で詩集「生活の挽歌」出版
1929：第七高等学校造士館(旧制)国文学教授	「南方楽園」創刊、研究誌「日本文学」主宰
1935：文部省入省(途中、鹿児島県立大島中学校(旧制)教頭)	1931：鹿児島で「野心ある花」出版
戦後：鹿児島で沖縄貿易を営む	・日置市立花田小学校(1932制定)
1957：中央高等学校(コザ市)校長	・宜野座村立宜野座小学校(1932年制定)
国際大学(沖縄国際大学前身)教授	・鹿児島県立大島中学校(旧制)(1937年制定)
副学長、名誉教授	・鹿児島市立吉田北中学校(1947制定)
1972：沖縄大学教授、学長	・鹿屋市立鹿屋中学校(1950制定)
	・指宿市立山川小学校
	他 沖縄県内小・中・高校校歌を多数作詞

前述の「吉田北中学校のあゆみ」によると、本校校歌の作詞は当時本校に勤務していた「平原政治先生が友だちを通じて交遊があったらしく、先生が交渉されたそうだ。」と書かれている。

その続きには、「小学校講堂でPTA会が開催され、新屋敷氏の講演もあった。そして、取材のため近くの川のほとりや山を歩かれたが、半日の取材ではもの足りぬから、浜田さんの歌日記でも見せてくれぬかと相談を受けた。私は新屋敷先生のお出しになっていた『南方楽園』の誌友でもあったし、また以前から面識もあったからである。

望郷の念やみがたくして、他郷でつくった私の短歌にこんなのがあった。

春くればアネモネの花の競い咲く高牧山をわれは恋おしむ

先生がそのアネモネの花と高牧山を校歌の中に入れて下さった感激は、今も胸壁にこびりついている。」とある。(この部分は校歌の3番の歌詞にある)

(2) 作曲「河野 吉直」氏

作曲の河野吉直氏については、前述の「高牧山のふところに」や「創立30周年記念誌」にもその記述がみあたらない。ネット検索では、神奈川県藤沢市立片瀬中学校校歌の作曲者(26年制定)として同姓同名の方がみつかった。同校に問い合わせしてみたところ、昭和26年当時には同校の教諭としても勤務していたようだが、学校に旧職員履歴書は残っておらず、詳細は不明である。ただし、片瀬中の湯山薫校長が当時の同僚(92才)に話を聞いてくださり、その話では神奈川県出身者ではなかったらしいということまでは分かった。また、神奈川県教育委員会にも問い合わせただいたが、正確な退職年度が分からないと、データベース化されていない資料からの個人検索は難しいとの回答だったようだ。

ネット検索では別の情報もヒットしている。ヤフオクのサイトに「三菱重工業株式会社の長崎兵器製作所記念歌」というレコードが出品されており、ラベルに「独唱 河野吉直」と印刷されているのを見つけた。(同一人物かどうかの確認はできないが、同年代なので多分間違いないと考える)加えて、伴奏に松山芳野里新興歌劇管弦楽団とあり、この松山氏は鹿児島出身のオペラ歌手で、本名を松山義方といい、東京音楽学校の卒業生指名録に大正元年11月卒業(国立国会図書館デジタルコレクション)と記載されている。また、南さつま市立加世田小学校校歌の作曲者でもあり、昭和音楽大学オペラ研究所のオペラ情報センターの資料には、1939年藤原義江歌劇団のオペラ「椿姫」にこの松山氏(舞台主事)とキャスト(オヒニー侯爵役)として河野氏が名を連ねており、鹿児島出身者の音楽家とのつながりがあることも分かった。

3 歌詞に取り上げられている場所について

(1) 松尾の山

松尾城跡のある山である。吉田の郷土誌の松尾城の項には当時の写真があり、グラウンドに立っているバレーボールの支柱越しに思川を挟んで松尾の山の全景が見えている。(開校当時の本校校舎は校庭の北西側にあった。)また、同項に松尾城は、吉田氏累代の居城であったが、永正五十四年に島津氏に敗れて城を献上した。永禄五年に島津左エ門歳久が吉田に封を受けて当城に居る。その後、歳久は天正八年に祁答院に移封せられて当城を去る。とある。城跡の入口には島津歳久公招魂碑があるが、歳久の自刃後六十年余以降の建立であり、別の目的で建てられたのではないかともある。

(2) 女山川

現在の地図に女山川の標記はないが、吉田町郷土誌の野町図[(5)①図参照]には東佐多浦の城内南集落にあった野町の様子とその南側を流れる本城川(女山川又ハ後川ト云)が思川(大川又ハ前川ト云)につながっている様子が記載されている。現在の地図には本城川の標記もないが、県立少年自然の家(北側の山中)にある本城の滝の下に本城川の源流があることも「かごしま水辺環境ガイドブック」に記載されている。「高牧山のふところに」の吉田の道の項の冒頭には「吉田小学校の入口に

ある我が家は、県道に沿ったちょうど三叉路の地点にある。(中略) 前方の南への道は川上町をへて鹿児島市に至る。女山川の支流と合流して思川は海に注ぐ。」とあるように、本城地区を流れる本名川を昔は本城川と呼び、その途中に女山滝を源流とした流れが合流して思川に注ぐまでを女山川と呼んでいたようだ。

(3) 高牧山

現在の地図には高牧との標記しかないが、「吉田の郷土誌」には、朝夕吾々と生活を共にしている「高牧」は標高 429m、薩藩が設けた県下二十牧場の一つで馬を飼育した跡である。(中略) 元禄絵図によると、高牧内に「おろたん」という所がある。馬木戸の「おろ」といわれる場所なのか、「おろ」では馬よせをして、馬に塩を興えた場所らしく塩食わせ松があったそうだ。又、福ヶ野には馬の「テツ」をつくった鍛冶屋があり、「古鍛冶」という姓が残っていたという。この高牧は薩隅日地誌によると、元吉田郷に属していたが、元文二年佐多浦の一部が重富に属した時、今の触畑と共に重富に移った。今の高牧は終戦後開拓の人達に移り住んだ所で、高牧分教場跡付近の畠から土器が出るとこの人たちが話していた。とある。

高牧山のふとこころに — 私の歳月の項には、「東陽は青年学校長の傍ら村長からたつての頼みの在郷軍人分会長を引き受けたため、復員はしたものの追放になり、帰農に踏み切った。小作の田畑を返してもらえず、高牧山の雑木林を開墾した。」とある。東陽とは浜田喜代子さんの夫である。また、高牧亭という詩には、「亡きの祖父の仕立てた杉山をたおして造り上げた家(中略) 高牧山と思川 自分の周囲に山と川があるのは現在ではいちばん贅沢 作家と医者二人の先生が名づけてくれた高牧亭 このバンガローに今日も幸せの日が過ぎてゆく」とある。

(4) 思い川

前峯付近から、蛇行しながら東佐多浦へ北中校区内を縦断し錦江湾に注いでいる。地図の標記は思川であるが、浜田喜代子さんの短歌に思い川と詠んだ部分がある。創立 30 周年記念誌 P 6 5 浸水防止のことによると「校庭への浸水がひどく学校・校区民一体となり浸水対策を村にお願いしていた。当時の村長橘公監は河川改修以外に根本的手段はないと判断(中略)、鹿児島土木事務所の指導を受け、重富村と共同陳情をするようになった。28 年 11 月、建設省に両村共同の陳情書を提出後、二カ年の空白期を経て改修工事实施、ここに浸水からまぬかれることになったのである。」とある。

「高牧山のふとこころに」の歌集『籐椅子』の項に「思川、女山川、高牧山と、昔吉田には文化人が住んでいてこんな良い名前をつけたのだろう、とお気に召していたようであった。」とある。(鹿児島アララギの歌会を通じてお世話になった村田豊作医師を回想した一文)

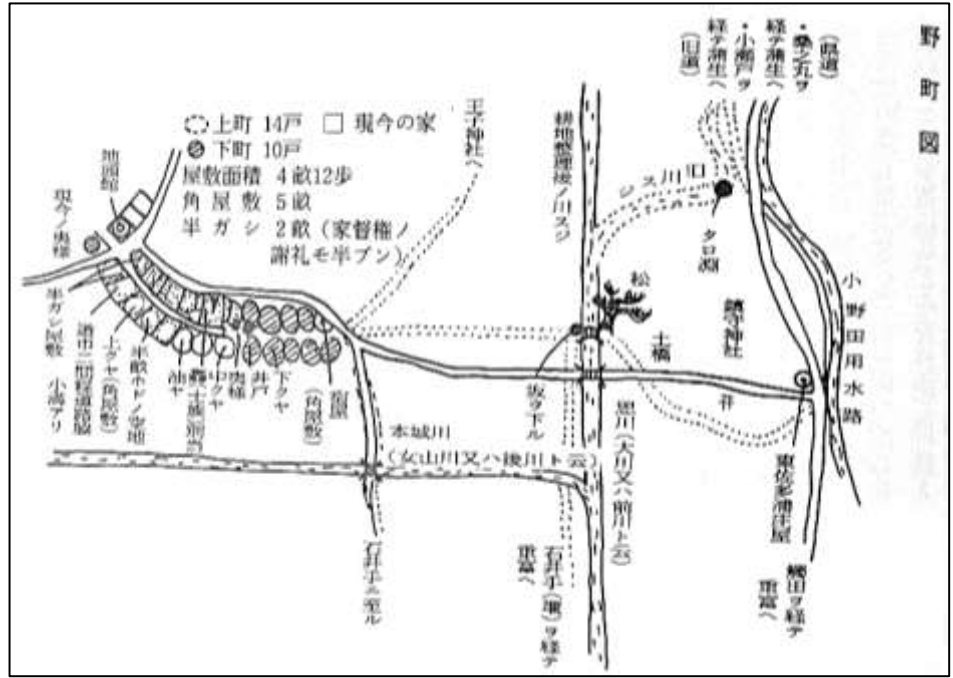
重富校区コミュニティ協議会の「重富散歩」には、思川は、我が国で初めて日本地図を造った「伊能忠敬」の記録には「渡瀬川」と書かれていますが、幕末に罪を得て思川のほとりで 殺された愛娘「おべんさん」を嘆き悲しみ毎日のように思川の岸部で嘆き悲しんでいた父親の姿が皆の涙を誘い、いつしか人々が「思川」と呼ぶようになったと伝えられています。との思川の名前の由来の記述もある

(5) 補足資料

① 野町図

(吉田町郷土誌より)

② 高牧山のふところに



③ 正門前から見える高牧山と松尾城跡の様子



④ 学校周辺地図 (校歌に歌われた山と川)



⑤ 開校当時の学校敷地略図

